

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520795

研究課題名(和文) 出土文物の分析による4～6世紀東アジアにおける文化融合・社会変動の研究

研究課題名(英文) A Study of Cultural Assimilation and Social Change about East Asia in the 4-6 Centuries by Analysis of Archaeological Materials

研究代表者

小林 聡 (KOBAYASHI, Satoshi)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：40234819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、4～6世紀前後における東アジア世界の出土文物が表現する文化や生活にかかわる諸要素、とりわけ服飾要素を分析することによって、この時期の民族移動や文化融合の実態を明らかにすることである。

この計画に沿って、4年間間に、中国本土の他、日本列島、朝鮮半島諸国、新疆地区、内外モンゴル、ウズベキスタンにおける3～8世紀の服飾資料をデジタルデータの画像形式で収集し、1万ファイルを超えるデジタルデータを得ることができた。これによって、当該時期における服飾史を民族分布・民族移動・社会変動などとの関連から再構成することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is clarification of ethnic move and cultural assimilation in the 4-6 centuries East Asia based on analysis of artifacts, especially clothes, concerned culture and life that expressed in Artifact in this period.

In these four years, I collected digital data of archaeological materials in China main land, Japanese Archipelago, ancient kingdoms of Korean peninsula, Xinjiang Area, Mongol, and Uzbekistan, the total number of JPEG images reached 10,029 files at March 2016. This research can reproduce history of clothes related with ethnic distribution and move, or social change in this period.

研究分野：中国制度史

キーワード：服飾制度 中国 出土文物

1. 研究開始当初の背景

現在、魏晋南北朝史研究は、従来からの伝世文献研究に加え、出土文物を活用した研究が盛んである。古墓から出土した文物としては、墓誌銘の他、人物俑などの副葬品、さらには壁画資料も、造営当時の社会の実態を研究する上で欠かせない研究素材であると言えよう。研究代表者(小林)が研究している「礼制」、たとえば服飾制度について言えば、人物俑や壁画などは、文献では判明しない実際の服飾の様子を示す貴重な材料であると言えよう。

本研究の前段階として、平成 20～22 年度の科研テーマに採択された基盤研究(C)「出土資料の分析による古代東アジアの服飾制度と社会秩序」があるが、この研究では服飾制度を中心に、出土文物をデジタル画像化して収集していき、一定の成果を上げたと自負している。ただ、反省点としては、収集の範囲が「魏晋南北朝」の中国本土の出土文物が中心になり、それ以外の時代や地域がやや手薄になってしまった点が挙げられる。研究代表者の研究目標は、民族移動とそこから来る文化融合の軌跡を追っていくことであるので、より広い範囲で服飾関係の資料を収集することによって研究をより進展させていかねばならないと感じた。

そこで平成 24 年から開始された本研究では、服飾資料の収集範囲をさらに広げ、東アジアの各地域の状況も視野に入れつつ、研究を進める必要があると考えた。

2. 研究の目的

研究代表者の研究上の関心は、漢唐間における礼制の変遷であり、特に 4～6 世紀において、華北において北族の政権が相次いで建国され、江南でも漢族王朝が独自の制度を構築していった状況下において礼制がどのように変化していったのか、そういった試行錯誤が隋唐王朝の諸制度に結実していった過程はどのようなものであったのかということを探ることに主眼を置いている。また、中国における礼制改革が、東アジア諸国の国家形成にどのような影響を与えたのかについても関心がある。本研究の大きな目的は、4～6 世紀前後における東アジア世界の出土文物において表現されている服装・住居・食物・楽器など、文化や生活にかかわる諸要素を分析することによって、この時期の民族移動や文化融合の実態を明らかにすることである。

4～5 世紀については、甘肅省河西・遼寧省朝陽・山西省大同の 3 地区の文物を、6 世紀については、北朝諸王朝の文物を重点的に収集・整理・分析する。

さらには、前回(平成 20～22 年度)の科学研究費における反省から、収集範囲を大幅に広げたいと考え、河西(甘肅北部)地区の魏晋画像磚資料や、北朝から盛唐にかけての敦煌壁画についても本格的な服飾資料の収集・デジタル化作業を進めたいと考えた。また、同時期の日本列島から新疆地区に至るまでの東アジア・中央アジア諸地域の出土文物も収集・分析し、文化融合、あるいは社会的な変動の実態を明らかにしていく(詳細は「3. 研究の方法」参照)。

3. 研究の方法

本研究は、およそ下のように 2 段階に分かれるが、当面は(1)の段階を主にして考えた。

(1) デジタル画像の収集・整理……まず、収集文物の対象として、画像石・画像磚・綫刻画・壁画・陶俑、及び石窟寺院遺跡のレリーフ・壁画などに表現された人物像の中から服飾資料として研究上の使用に耐えるものを選別し、デジタル画像化した。ソースは、基本的には各種発掘報告書・研究書に載せられたものとするが、一方、中国各地の博物館で撮影した写真・動画等も資料として使用した。4～6 世紀やその前後の時代の東アジア各地における各種の出土文物をデジタル画像として収集する作業は継続した。助成を受けることによって、高価な図録を購入し、またできる限り多くの博物館で実物を撮影することが可能になり、デジタル画像の量を充実させていくことができると考えた。

なお、出土文物は、中国本土のものとして以下のように(a)～(h)に分類した。

- | | |
|----------|----------|
| (A) 漢代 | (B) 魏晋 |
| (C) 南朝 | (D) 北魏 |
| (E) 東魏北齊 | (F) 西魏北周 |
| (G) 隋 | (H) 唐 |

次に、中国本土以外の文物としては、以下の(I)～(K)のように分類した。

- | |
|-----------------|
| (I) 古代日本(倭国)の埴輪 |
| (J) 高句麗壁画 |
| (K) 北アジア・モンゴル高原 |

また、その他の文物があった場合にそなえて(L)を設けた。以上のような分類を行って、出土文物のデジタル画像の収集を続けた。(A)～(H)については、これまでに収集したものの他、出版されているものを随時取り込んでいったが、とりわけ期間中に訪問した中国内蒙古自治区のフフホトでの写真撮影(内蒙古博物院などに見られた北朝時期の出土文物)などが有益であった。また、敦煌壁画については、本研究開始までは一部しか収集しなかったため、今回は敦煌莫高窟壁画・麦積山壁画の画像を多く収集することを目指した。

(2) 出土文物を活用した研究……「研究目的」で挙げた諸地域の出土文物を重点的な検討対象とし、(1)で述べた作業を土台として、文物の分析を進め、中国文化の要素とそれ以外の要素(北族・西方諸民族・東夷系統の諸文化)の併存・融合の状況などから、国家形成や社会統合の様子を再構成していった。時代としては大きく後漢時代から盛唐期にかけての時期を想定し、なかでも服飾制度の転換期であり、出土文物にも恵まれた北朝末期～初唐期を重点的に研究しようとした。

4. 研究成果

研究は基本的に順調に進んだ。まず、収集した出土文物など、服飾史関係のデジタル化作業であるが、最終的に平成 28 年 3 月の時点で、以下のよ

うな成果を上げることができた。

- (A)後漢 415 点 (主として画像石・壁画・人物俑)
- (B)魏晉・五胡十六国 1234 点(主として画像磚・壁画・陶俑。なお、河西地区の画像磚画像磚 667 点、及び新疆トルファン地区の出土絵画資料若干を含む)
- (C)南朝 221 点(主として陶俑)
- (D)北魏 1388 点(主として壁画・綫刻画・陶俑)
- (E)東魏・北齊 868 点(主として壁画・陶俑)
- (F)西魏・北周 690 点(主として壁画・陶俑；敦煌莫高窟壁画・麦積山壁画を含む)
- (G)隋 881 点(主として壁画；陶俑敦煌莫高窟壁画を含む)
- (H)唐 3854 点(主として壁画・陶俑；敦煌莫高窟壁画を含む)
- (I)日本の埴輪 122 点(主として関東地区)
- (J)高句麗 171 点(吉林省輯安地区、及び北朝鮮平安道・黄海道地区の壁画)
- (K)モンゴル・ウズベキスタン 117 点(主として壁画・石人)
- (L)その他 68 点(各種の「梁職貢図」に載せられた各国の人物像)

4 年間の研究を通じて、当該時期における服飾関係の画像資料の(公開されているものうち)大半をかなりデジタル化することができた。

前回(平成 20～22 年)の科学研究費に比して、より広い範囲の出土文物のデータを収集することができたが、特に敦煌莫高窟壁画や、モンゴルの突厥石人、さらにはサマルカンドの旧ソグド地域のアフラシアブ遺跡などの壁画データ、各種『梁職貢図』の使節像などを収集し、中国本土だけでなく、様々な地域・民族の服飾データを収集することができた。

反省点として挙げられる点は、唐代のデータが 3854 点とほかのジャンルに比して多いにも関わらず、細かな時期区分や地域区分ができなかったことである。たとえば、7 世紀～8 世紀前半の時期(初唐から盛唐にかけて)の服飾史上のより細かな時期区分の糸口がつかめなかった点も反省点として挙げられる。また、唐代の東北方面国境近くに位置する朝陽地区(唐代の営州)の出土陶俑は、唐三彩を使用しないなど特異な点が多々あるが、これについての考察に行き着けなかった。これらの諸点は今後の課題になる。

以上のように収集した資料をもとに、漢唐間、とりわけ魏晉南北朝時期における服制に関して、以下のようなおおまかな見通しをおこなうことができた。すなわち、漢代にまでに形成された服飾体系(特に公的な服飾のセットである朝服)が魏晉

以降衰退し、その一方で鮮卑系やソグド系等の服飾が中国本土に流入し、6 世紀頃には漢族の服飾と融合して、独自の服飾体系を作り上げていった。

この現象は、6 世紀中葉・後半の華北東半部に存在した東魏・北齊政権でも、華北西半部を拠点とした西魏・北周政権でも起こり、隋から初唐にかけて整備されていった。こうして漢晋期の祭服・朝服二元体制から、初唐期には祭服・朝服・公服・公事之服(弁服と平巾幘)・常服という五大(あるいは六大)服飾体系が制度化されていった。漢晋期の服制と唐の服制の大きな違いは、朝服から公服や公事之服が分化した点と、常服が新たに加わった点である。

常服は、漢民族伝統の服飾ではなく、鮮卑服や西域の服飾に起源を持ち、前述のように北朝末期に公的服飾として洗練されていったものであるが、隋唐時代には官人など支配者層が日常生活において着用する服飾として制度化された。このような常服の体系化・制度化が、祭服や朝服など漢民族固有の服飾制度の変化と平行して起こっていることになり、これは中国固有の文明規範たる「礼制」の改変を意味しており、このことはまた、中国文明の可塑性を示す恰好の事例と言える。また、このことは、広く言えば 4 世紀以降ユーラシア全体で起こった民族移動や文化融合の中国的なあり方であるということができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 川本芳昭、東アジア古代における「中華」と「周縁」についての試論、(査読無)古代ユーラシア研究センター年報 2 巻、91-109 頁、2016 年 3 月
2. 川本芳昭、前近代における所謂中華帝国の構造についての覚書、(査読無)史淵 151 輯、1～40 頁、2014 年 3 月
3. 小林聡、オテケケン山からバグダードまで、(査読無)埼玉大学紀要教育学部 63 巻-1 号、199～219 頁、2014 年 3 月
4. 川本芳昭、漢唐間における雲南と日本の関係について、(査読無)九州大学東洋史論集第 41 号、1-27 頁、2013 年 3 月
5. 川本芳昭、北朝内朝再論、(査読無)中国魏晉南北朝史学会第十屆年會論文集、53-71 頁、2012 年 8 月

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 川本芳昭、ウィットフォーゲルの所説について 周辺同化論と浸透王朝論を中心として、九州史学会、2015 年 12 月 13 日、九州大学(福岡県福岡市)
2. 小林聡、北朝隋唐における南朝系貴族群のあり方についての基礎的考察、九州史学会、2015 年 12 月 13 日、九州大学(福岡県福岡市)
3. 小林聡、墓誌から見る北朝隋唐にける南朝系士人 理論的枠組の構築に向けて、日中合同中国石刻国際シンポジウム、2015 年 12 月

- 12日、明治大学駿河台校舎(東京都千代田区)
4. 川本芳昭、東アジア古代における「中華」と「周縁」についての試論、シンポジウム/古代ユーラシアにおける中心と周縁、2015年11月7日、専修大学(東京都千代田区)
 5. 川本芳昭、前近代における所謂中華帝国の構造について 北魏と元・遼、および漢との比較、九州史学会、2013年12月8日、九州大学(福岡県福岡市)
 6. 小林聡、魏晋南北朝における礼制研究のあり方 儀礼・輿服と官爵体系を題材として、魏晋南北朝史研究会、2013年9月14日(福岡県福岡市)
 7. 小林聡、漢唐間の礼制・服制史における北朝の位置、九州史学会、2012年12月9日、九州大学(福岡県福岡市)

〔図書〕(計4件)

1. 川本芳昭 東アジア古代における諸民族と国家 汲古書院、2015年3月、総頁532頁
2. 川本芳昭ほか、日中歴史共同研究報告書、勉強出版、2014年10月、総頁611頁(89~120頁)
3. 平勢隆男、紙屋正和、小林聡、川本芳昭ほか、川勝守・賢亮博士古稀記念東方学論集、汲古書院、2013年10月、全1052頁(小林267~296頁、川本297~322頁)
4. 沙武田、小林聡ほか、高台魏晋墓与河西历史文化研究、甘肅教育出版社、2012年4月、総頁632頁(349~358頁)

6. 研究組織

(1)研究代表者

小林 聡 (KOBAYASHI, Satoshi)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：40234819

(2)研究分担者

川本 芳昭 (KAWAMOTO, Yoshiaki)
九州大学・文学部・教授
研究者番号：20136401